●小学校高学年の部

ペットの気持ちを考えて

堀内小5年　澤田　奈津季さん

あなたは、捨てられている動物の数を知っていますか。わたしは、年に2、3びきしかいないだろうと思っていました。しかし、マルコさん一家がひろった動物の数は、一年で二十ぴきぐらいです。わたしは、なぜこんなに捨てられる動物の数が多いのか、この本を読むことで知ることができました。

この本を読みながら、はじめに今までの自分の犬やねこに対する考え方をふりかえってみました。わたしが考える犬、ねこの最初のイメージは、うるさくて、こわいと思っていました。けれど、この本には、「人を攻撃したり、かんだりするコは、いない」と書いてありました。わたしは、この本を読んでいくうちに、今までの犬やねこに対する「こわい」という考えが、「かわいい」に変わりました。そう思って犬やねこを見ると、今まで見ていた同じ犬やねこが変わって見えました。今では、犬を飼ってみたいと思えるほど好きになりました。

次に、犬に対しての接し方を考えました。わたしはテレビで犬、ねこをしかっているシーンをたくさん見たことがあります。でも、マルコさんは、「怒ってばかりではダメ。動物はせんさいで感情豊かな生き物。愛情をそそぎこめば『気持ちのおかえし』も大きい。」という考え方を、この本に書いています。わたしは、ペットを飼ったことがないけれど、しかってばかりいても、だめだという考え方には賛成です。人間だって同じと考えるなら、こちらの考えを伝えるような口調で話しかけたり、接したりすることで、気持ちが伝わると思います。

わたしとしての飼い方が分かったところで、自分のまわりを見わたしてみました。わたしの近所の家では、ほとんどの家が犬をくさりにつなぎ、外で飼っています。雨の日も、雪の日も、犬小屋でうずくまっているすがたが印象的でした。わたしは、犬を家の中に入れ、寒い時にはいっしょにあたたまり、暑い日にはいっしょに遊びたいです。そして、犬を家族としてあつかい、少しずつでも犬の気持ちを分かっていきたいです。

この本を読む前までは、犬は外にいてほえているのが当たり前だと思っていました。この本の言葉をかりると、「家族を守ってくれる、番犬のような犬らしい犬はいないし、人間よりもはるかに発達している本能で地震を予知してくれるねこもいない。しかし、みんなイイコばかりだ。」とマルコさんは言っています。わたしも、どんなにゆうしゅうじゃなくても、何の役に立たなくても、犬、ねこたちをかわいがり、幸せな日々が送れたらなと思います。「日本のペットは幸せなのか。」と本の中でマルコさんは問いかけています。ペットは、わたしたちを守る道具でも、つかれをいやしてくれる道具でもないのです。

※澤田さんは6年生に進級しています。（原文のまま掲載）

戦争体験記第3集を発刊

村教育委員会は「戦後六十年、よみがえる記憶」と題し「私の戦争体験記」第三集（右写真）をこのほど発刊しました。

戦争体験記は、忘れえぬ異国での軍隊生活を綴った第1集、第2集に続く第3集。村内在住者9人と村出身者5人の計14人が執筆しました。「戦争の悲劇に涙」「集戦前夜」「日本と戦争」など戦争で失った家族や戦後の悲惨な様子などが鮮明に綴られています。

冊子はB5判、72ページ。200部作成し関係機関などに配布しました。なお、冊子は販売しておらず、村図書室に20部用意し、希望者には貸し出しています。

●村図書室（☎36―1044）